

## Editor's Note

### 講評

今年度、卒業論文は3編提出されました。

利他行動とユーモアの関係を従来になかった新しい方法で実験的に検討した草柳さん、音から色を感じる色聴共感覚を持つ方を対象に、世界で初めて左右の耳に別の音を聞かせる両耳法を適用して検討した山下さん、ヒトの共感能力をラバーハンド錯覚と他者の表情読み取りのテスト (RME) というこれまで先行研究にはない新しい組み合わせで検討した小林さん、いずれの論文もオリジナリティと将来性において諸先輩たちに引けを取らないエキサイティングな卒論でした。もちろんデータ量や結果の分析方法など、まださらに改良しなければならない点は多々ありますけれど、後輩のだけれど、これらの研究を継承しさらに発展させてくれることを大いに期待したいところです。

さて例年、できるだけ多数の卒論を日本心理学会などの公けの学会で発表させるというのが山上研の教育ポリシーでした。今年は今号の「巻頭言」で述べた通り、日本心理学会第76回大会がわが生田キャンパスで開催されます。そのために、ボクが企画代表のシンポジウムがあったり、大会の運営責任者としての仕事も大変なので、多数の発表をスポンサーすることができません。せいぜい1本が限度かもしれません。

去年まで山上研の博士課程の大学院生だった榎本さんは2011年4月から学科の実習助手として入職されました。榎本さんには新人職員としてとても忙しい中、前号に引き続き最新の「身体化」の問題を分かりやすくレビューしていただきました。博士論文の序文の一部となるべき内容です。

山上研年報第2巻では、新しい企画として、研究法1＝プレ卒論文を掲載することにしました。山上研のプレ卒論文の提出期限は伝統的に3月末日としておりましたが、年度内にこの年報を発刊するために、やむを得ず締め切りを2月末日に早めさせてもらいました。つまりプレ卒の研究期間が1ヶ月も短縮されることになったわけです。一方、3年生にとっては、今年度の就職活動の開始時期が例年に比べて2ヶ月ほど後延べになったこと、つまり昨年末から就職活動が解禁になったことが、実験を行うスケジュールに大きな影響を及ぼしました。さらに今年も就職状況はなかなか厳しいものがあります。

このような実験と研究期間の短縮および厳しい就職状況という二重苦にもかかわらず、特に現役3年生のプレ卒論文は、例年のプレ卒研究の到達水準に勝るとも劣らないものとなりました。これは現役3年生諸君の大いなる努力の結果であると思います。よくがんばったと自分をほめて良いでしょう。ただ、引用論文の引き方や文献リストの作り方などの細かい点において、まだ十分に神経が行き届いていないところが多く、ボクがメガネを外し原稿に顔を近づけて、コンマやピリオドのうち方から始まって、論文のページが書かれていないものや、著者のファーストネームのイニシャルが書かれていないものなどについて、原論文を検索して書き加えたり直したりすることに多大な時間を必要としました。来年度は、授業内でこれらの点をいちいち細かく指摘して修正するようにすることにします。決意を強くしました。

いろいろな事情があって、昨年プレ卒を提出できなかった竹迫さんと藤田さんが今年は締め切りまでに形を整えて提出することができました。データの量や考察、さらには文献作法などの基本的な記述において改善すべき点が多々あることは確かですが、卒論に向けてのスタートポイントになると思います。二人が締め切り直前で見せた集中力は、うまく自身の動機づけをコントロールできれば、何事でも達成できるという証明になったと思います。すばらしい卒業研究をまとめるというポジティブイメージを胸にあと1年精進してください。期待しています。

今年度、残念ながら論文提出にいたらなかった諸君は、なぜそうなったのかを虚心に反省し、来年こそはすばらしい研究をまとめてください。

( 2012年3月5日 山上 精次 )